

# '87 '88 協友会越冬活動報告

、87、88協友会越冬活動報告（P8～P23）は、夜まわりをはじめ、越冬期の諸活動を伝えるものです。87年12月に実施された市長候補への公開質問状もその一つですが、新しい市長になった西尾正也氏の回答は、大阪市が釜ヶ崎労働者のことを真剣に考えていない証拠です。

## 月曜夜廻り「なんで」夜廻りを

「なんで夜廻りをするの、なんでおにぎりをわたすの、なんでみそ汁をあげるの、なんで野宿せなあかんの」——この土曜夜廻りの子どもたちの歌には考えさせられます。この「なんで」を月曜夜廻りももっと大切にしてゆきたいと考えています。「なんで」は長年夜廻りをしている私たちにこそ問いかけられてはいないでしょうか。それは、夜廻りが私たちの善意のためではなく、野宿労働者中心の夜廻りへの絶えざる挑戦を意味しているからです。

月曜夜廻りは、まだ学習会をしていません。これは夜廻り参加者の都合によって出来なかつたという理由が大きいのですが、それだけではありません。野宿する労働者にまず触れてみる、野宿する労働者のためにまず行動してみる、そのことを方をまず優先してきたからだと思います。この豊かな日本で野宿する労働者が存在するという現実を衝撃を受けて、ささやかでも行動してみることにはまず意味があると考えてきたからです。だが夜廻りによ

って釜ヶ崎問題が解決するはずがありません。夜廻りは、病気でいえば熱冷まし程度のことです。その熱冷ましも充分でないかもしれない。原因の究明、根本的治療への道の追求、ここから学習会が生まれてきたのではないか。月曜夜廻りでは、今年の越冬期間中も学習会をしませんでした。夜廻り出発前の十五分程度のミーティングでお茶を濁してきたと思います。これでよいのかどうか。「なんで」をもう一度問いかけ、自己批判の中から野宿労働者中心の夜廻りに変えられるよう来年に備えたいと思います。今年越冬では、まず夜廻り出発時間を思いきって九時から十二時に遅らせました。九時ですと、ダンボールを集めている労働者は

まだ働いている時間だし、商店街も開いている。それに冬は寒い時間ほど野宿死の危険が高い。反対意見もあったが、こういった理由から十二時出発に変えました。結果としてプラスとマイナスの両面が出たが、野宿者が少なかったことが幸いだと思います。野宿労働者の実数をつかむにはより遅い時間がよいが、労働者との対話という面からは、早い時間の方がベターだといえます。結局越冬後は十時出発としています。

また、夜廻りのコースについていえば、従来の四コース（南・北・日本橋・天王寺）以外に、上六や難波、梅田周辺を試験的に廻ってみました。上六や難波は割合に元気な人が多いようですが、梅田周辺はケアを必要とする人がおられます。それで梅田コースは越冬後も廻っています。私たちは他コースを廻ってみて、釜ヶ崎の野宿労働者の周辺地域への拡散化が進んでいること、大阪駅を中心とする周辺地域の野宿者が常時数十名以上おられることを確認することが出来ました。釜ヶ崎の野宿労働者と梅田地域の野宿者とのつながりの如何、大阪市内全域で増加するホームレスの人々との連帯からも、私たちは今後も従来の四コース以外への取り組みを当分続けてゆくつもりです。

今年の越冬では一つの大きなショックがありました。一月二十六日、私たちの夜廻り直



後の朝三時頃、南コースで二人の労働者が亡くなられていたのを発見されたことです。私たちが普段夜廻りする道からわずか離れた路上でした。廻る道がいつしか習慣化してしまっていたのではないかと反省させられます。「なんで」夜廻りをするのか、何度も問いかけ、廻る道についても注意を怠らないようにしたいと思います。

月曜夜廻りの今後の課題は他にもあります。私たちは一年を通して夜廻りをしてきました

が、越冬期よりはるかに野宿者が多いアブレ期の対策をもっと考えなければならぬのではないのでしょうか。まずより多くの夜廻り参加者を求めること、デイベートルのよきを見直すことなどです。また夜廻りがやりっぱなしで終わることなく、入院した労働者への病院訪問を徹底させたいと思います。夜廻り記録の継続、情報の収集、出合いの家、ふるさとの家、愛徳姉妹会、暁光会との連携をより図ることもあります。また釜ヶ崎の労働者が多く入院している悪質な病院に対しては、医療連とともに積極的な取り組みをしてゆきたいと考えています。(F)



連帯集会であいさつする中島協友会代表

## 木曜夜まわりの学習会

例年よりは暖冬であり、仕事の量も多いという事で今年の越冬夜廻りは少しは楽にできるのではないかと思っていたが、終わってしまえば三十名以上の労働者が路上で亡くなってしまおうという厳しい状況だった。

路上で野宿を強いられている労働者の状況は大まかにいうと、釜ヶ崎の中よりも周辺部の天王寺・日本橋・難波の方に多くの労働者が野宿を強いられている。何人かの労働者に話を聞くと、釜ヶ崎の中はシノギ（路上強盗）が多く安心して寝れないという事らしい。ただ、非常に酔っている人、明らかに体の弱っている人が多いのは釜ヶ崎地区内である。越冬中の犠牲者のはほとんどは釜ヶ崎地区内で野宿していた労働者だ。いくら仕事が出ても体力のない人は野宿せざるを得ないし、野宿すれば体を更に悪くしていく悪循環は昔から変わっていないようだ。

夜廻りは夜廻りに過ぎないが、そこで気付いた問題にぶつかっていく手がかりにはなる。いつもより多くの人が集まるのだからテーマを決め、みんなで意見を出しあえば問題も少しは深く共有できるのではないかと考え数年前から学習会を行っている。今年の学習会の一つ一つのテーマはどこに出しても恥ずかしくないと思うのだが、責任者の勉強不足もあ

り今一つの盛り上りだった。自分自身の反省も含めて、内容について記してみた。

## 日雇い構造と釜ヶ崎

「重層の下請け構造」という言葉が示すように土木・建築業界は多くの下請けのもとに成りたっている。釜ヶ崎はその構造の一番下に位置している。

去年からずっと日雇いをしているO君によれば、「A山と飯場に行つて、そこでN山という業者に連れて行かれ、O林組の現場で働いた」というように多くの下請けのそのまた下の業者に釜ヶ崎の労働者は従事している。多くの下請けを通せばもちろんピンハネは多くなる。元請けから仮に一万二千円の単価が出ていたとしても多くの下請けを経ると労働者の手に渡るのは九千五〇〇円（もつと安いケタオチ業者はたたくさんいる）である。よく考えるとヤル気をなくしてしまいうだ。その上、景気が悪くなればまっ先に仕事にアブレるのも釜ヶ崎の労働者だ。「トカゲのしっぽ切り」のように弱い立場の労働者は切り捨てられる。労働者は「しっぽ」ではない。若くて元気な人はそれでも仕事はある。年をとったり（誰でも年はとる）病気がちの労働者は働きたくても働けない。万博の仕事のある

時期に釜ヶ崎に来た三十〜四十歳の働き盛りだった労働者で、現在体をこわし仕事に就けない労働者は多い。働ける時だけこきつかわれ、体をこわしても何の保障もない。やむを得ず外で寝れば、「浮浪者」「なまけ者」のレッテルを貼るひどい人々もいる。仕事さえあれば朝四時に起きてセンター（寄り場）に行く労働者が決して「なまけ者」であるはずがない。

## 原発と釜ヶ崎

今や「ふだん着エネルギー」（笑かす）の原発と釜ヶ崎の労働者とは関係があるのだろうか。チェルノブイリの事故でもわかるように原発は絶対安全ではない。安全といっている日本の原発も実は小さな事故はたくさんおこしている。また原発は「トイレなきマンション」と呼ばれ、高濃度の放射性廃棄物は処理できずにドラム管に詰められ、その本数は年々増加している。

原発の問題はこれだけではない。「夢のエネルギー」を強調する原発も被爆する危険の高い作業は全てロボットが行っているわけではないのである。日雇い労働者や出稼ぎ労働者が身を晒して行っているのだ。今ではおおっぱらに原発内作業の求人をしてる業者はないが、特定の手配師、人夫出しを通して従事させているのだから。業者にしてみれば、社会の嫌がる危険な仕事を稼げや日雇い労働者が行ってくれば大助かりだろう。

もし日雇い労働者が基準以上の放射線を浴びたことが原因で病気（ガンや白血病）を起こしたとしても原因を追求していく事は非常に難しいだろう。今まで何人かの人が裁判を起したが因果関係ははっきりしないときれ敗訴している。ましてや雇用関係ははっきりしていない日雇い労働者の場合より困難だろう。「ふだん着エネルギー」原発も日雇い労働者や出稼ぎ労働者の危険な仕事とひきかえによりやく成り立っている。

### 天王寺博と釜ヶ崎の歴史

「いのちいきいき」をテーマにした天王寺博覧会が八七年八月一日〜十一月八日まで開催されたが、釜ヶ崎の日雇い労働者にとってはいい事などまるでなく、悪い事ばかりだった。

八七年二月には環状線沿いの天王寺公園前にあった野宿労働者の住居を警察と土木局が一体となって無理矢理に排除し、「ゴミ」として捨ててしまった。天王寺博を前にしての環境「浄化」である事は明らかであった。もちろん天王寺公園の中で野宿していた労働者も天王寺博の工事前から排除され続けている。現在も。人を排除し、おまけに公園内の緑を引っこ抜いておいてどこが「いのちいきいき」だろう。天王寺博を見に行った労働者が作業服姿だったせいで入場を拒まれたという話も聞いた。

天王寺博の始まる前の天王寺公園は子ども

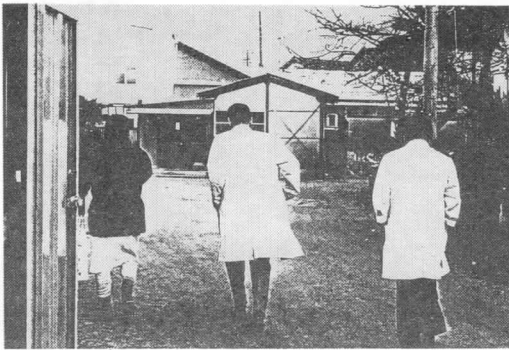
から労働者からアベックまで様々な人々がそれこそ「共存」していたと思うのだが……。天王寺博以後の天王寺公園は荒地のまま現在もほったらかしになっている。公園局は公園の有料化も検討している。

### 医療・福祉と釜ヶ崎

いわゆる中曽根「行革」の影響が最も顕著に現われたのは釜ヶ崎だといえる。市立更生相談所での保護率は下がり、年末の越年対策の臨時宿泊所の入所数は九〇〇人から七〇〇人へ大幅に縮小させられた。福祉行政は明らかに後退している。

この労働者にとってひどい状況に拍車をか

学習会—福祉病院と釜ヶ崎—広崎病院



病院職員

↑  
鉄格子越しの面会を終え帰る患者さん  
結核なのに外で立ったまま面会させられる。

けているのは日雇い労働者を食い物にしている悪質病院の問題である。昔からこれらのひどい病院は改善されていない。釜ヶ崎の日雇い労働者の多くは福祉で入院するために、自らは病院を選択できない。病院側も別に施設や処遇を改善しなくても確実に患者は来るのだから銭をかけて改善などしない。特に精神病院はひどい。患者の生殺与奪の権限は医者が握っており、退院したくとも本人の意志など無視される。

ひどい—ヶオチの病院の典型として和歌山の近くの広崎病院が揚げられる。（ここは結核病院）鉄格子に囲まれた建物。家族以外は面会させないという対応。我々がやっと面会できた時も、鉄格子越しでも立ったまままでという刑務所以下のものだった。今どき面会をさせない病院などあるだろうか？危険で過酷な労働現場で動かされ、もしケガや病気になるれば悪質な病院が口を開けて待っている。ひどい病院にはどんな文句をつけていかなければならないし、行政にもぶつかっていかねければならない。「入院できて良かった」と現在の病院の状況では言えない。

\* \* \*

越冬を明けて四月の夜廻りの時、北廻りにおいて、頭と耳から血を流し、雨の中倒れている労働者を見つけた。すぐに救急車を呼んだが瞳孔は拡散しており、一時間後に亡くなった。路上強盗かケンカか原因はわからないが、越冬が終わっても労働者をとりまく状況は依然として厳しいという事だろう。（F）

# 活動の積み重ねが大切だ

## 一、金曜夜廻りの状況

今回の越冬諸活動が始まる前に、色々な方から、「昨秋から例年になく仕事が出ているから、今回の越冬は余り難しくない様に見える。しかし、そんな中でも野宿せざるを得ないという事は、その人達の状態はかなり深刻だ」という事だから実情は決して甘くありません」という話を聞かされていた。

実際に協友会の越冬活動が始まり、希望の家が拠点となった金曜日の夜廻りを始めてみて、この言葉を実感させられた。

昨年は一月から二月へと寒さが強まるにつれ、相談として寄せられる事情も深刻なものになっていったし、翌日の医療センターへの診療のつきそいや入院・入所のための交渉の件数も増えていった。

今年、一月十五日に金曜グループの担当が始まるや否や、翌日の付添や交渉の状況は昨年並みのものとなっていた。

金曜グループの夜廻り担当期間中（一月十五日～二月末まで）、入院・入所まで到った方は五名でしたが、その後も、希望の家として例年続けているデイ・パトロールの折の相談や、越冬期間中に必要と思われる方にお渡しした地図により来訪され、相談の結果、入院・入所となられた方が数名居られます。

又、前回と今回の大きな違いの一つに、女性で野宿を余儀なくされている方に、釜ヶ崎内で多く出会ったという事があります。

最近、協友会の中で、梅雨期の対策と釜ヶ崎と女性という事がよく話題にのぼるが、越冬の後の課題として取り組んでゆく必要が、具体的に目に見えてきているのを感じさせられた。

## 二、学習会について

夜廻りに先立って、毎回学習会を行った。

学習会の内容は、後に記した通り、希望の家の日常活動の取り組みからの報告という形をとりました。私達は、釜ヶ崎の事にせよ、アルコールの問題にせよ（又、他の問題でも同じなのですが）とかく、自分の外側の問題、ひとごととして捉え、考えてゆきがちです。

その結果、ひとつの現実深く関わりながら、問題の本質や、自分自身とのつながりが見えないままに通り過ぎてしまう事が少なくありません。私達は、その所を、私達の平常の活動の中から、ご一緒に考えてゆきたいと思いました。

幸い、年間を通してのデイ・パトロールの報告からは、釜ヶ崎という街やここにまつわる様々の問題は、冬だけでなく他の季節も通

して見てゆく必要のある事や、夜の姿だけでなく、朝や昼の姿も見てゆく事の大切さを少しは分かって頂けた様に思います。

又、アルコールの問題についての学習では、「久里浜式アルコール・テスト」を各自試してみる中で、とかくひと事として考えてしまう事の多いアルコールの害が吾が身にも深く及んでいる事を知りました。その結果、労働者ひとりひとりの抱えている悩みや苦しみ、生活者である自分自身の問題でもあるという視点を与えられました。この頃になると、学習会の時点での質疑は相変わらず少ないものの、夜廻りの最中や、その前後に、スタッフ達に個人的に様々の質問をぶつけて下さる方もかなり現われてきました。

## ◎ 学習会の内容

- ① 1・15 パトロールのオリエンテーション
  - ② 1・22 デイ・パトロールを通して
  - ③ 1・29 ことばの説明Ⅰ（全般的に）
  - ④ 2・5 ことばの説明Ⅱ（夜廻りから入院入所までの流れに添って）
  - ⑤ 2・12 アルコールについてⅠ
  - ⑥ 2・19 アルコールについてⅡ
  - ⑦ 2・26 全体のまとめ
- 三、参加下さった方々

今回の夜廻りでは、続けて何回も参加下さる方が多く、又、一回当たりの参加者が三〇～四〇人と動きやすい範囲で、回を重ねる事

にチームワークもよくとれる様になりました。やはり一回限りでなく、続けて参加下さると野宿を余儀なくされている人達の状況もよく分かって頂けますし、労働者と助け、助けられる関係を超えた関わりが出来てくる様になります。

又、昨年に引続いて、ルーテル、カトリックそれぞれの教会から多くの青年が参加下さり、相互の交流が少しずつですがなされてきているのは、色々な意味でうれしく、有難い事です。

又、夜廻りだけで終わらずに、そのまま残って、翌日の医療相談や行政窓口への働きかけに参加して下さいる人々が前回に増してあつた事は、本当に有難い事でした。

従来なら、市立更生相談所の相談室へ、付添いのスタッフが入室する事につき、かなり激しいやりとりがあったりするのですが、女性のボランティアが付添って下さった折にはすんなりと本人ともども入室でき、それ程ひどい応待も受けず、無事入所出来た方もありました。支援下さる方々の姿が、具体的な形で行政の側に見えてゆく事は、釜ヶ崎の状況を変えてゆく、確かな一つの力です。

#### 四、その後

一回当たり三〇〇〜四〇〇人からの人々が釜ヶ崎内、日本橋、天王寺方面で野宿を余儀なくされ、その内五名の方が、金曜グループでは入院・入所されました。その後に数名増



えましたが、決して多い数ではありません。その後、別の病院や施設へ移った方もいますしかし、少くとも、その内の一名の方は病院を退院されてしまいました。昨年の経験から確実に病院訪問をしないと、周囲への気がねや、病院側の不手際で、自己退院される方が多い事を知っていました。しかし、入院出来る病院の多くは釜ヶ崎から遠く、訪問も容易ではありません。又、待遇や手当ての悪い所も多く、入院継続を支援するのも、限られた人数では困難です。どうぞ力をお借し下さい。又、要入院・入寮とまでは判定されにくいのが、自力で生活してゆくの困難な人々も多く居られます。その方々のために、私達に何が出来るか、一緒に何をしてくけるか、今後と共に考えて参りたいと思います。お知恵と力をお借し下さい。

最後に、参加者の声からいくつかをご紹介します。金曜夜廻りの報告を終わります。

「よい国、素晴らしい国とは一体何んなだろう。経済大国日本が向っている方向は決して良い方向ではないと思う。確かに物質的に

は恵まれ、世界中のありとあらゆるものが手に入る国ですが、本当にそれが豊かな『しるし』でしょうか。日本人はいつも自分の利益しか求めず、隣人を助けようとしません。釜ヶ崎の問題にしても、在日韓国人の問題にしても、被差別部落問題にしても、外国人登録法問題にしても、いつも弱い立場の人々がふみつけられる。困っている人がいたら助け合うのは、極当然のことではないでしょうか。その当然のことができない日本人に対し、同じ日本人として淋しさより恐しさを感じます。情報があふれている社会といわれますが、真実の情報は流れない日本社会なんだと思います」

「知人に、『お前は、何で釜のパトロール行ってるんネ』と言われます。あまり良くわかってないのが本心です。その知人は、西成区出身の男で、『お前らが何でするのかヨ一わからん』と言います。確かにその通りだと思います。私は、つい先日、高価な車を買いました。小遣いをたんまりもらい、遊んで遅く帰っても、電気毛布とぶ厚いフトンがまってる家で生活しています。今頃よく思います。自分が偽善者なのではないかと。八人の為と書いて偽と読むVパトロールのパンフレットの中で『社会勉強のためなら、来るな』……僕は本当は、ここへは来れない人間なのではと思いつつ、毎週来ています。自分と格闘しながらも。また来週も来ると思います。」



## 土曜夜まわりの会

# 「なんで夜まわりするの」

土曜夜廻りの会は、昨年度に引き続き、今年度も協友会の「グループ」として、越冬期の夜廻りを担当しました。

約二ヶ月間、毎週土曜日の夜、九時に集まって、ただ、夜廻りだけするのではつまらないと考えて、昨年度は学習会をしました。

今年は、夜廻りがはじまる前にリーダーが集まり、せめて夜廻りの前に一緒に唱える歌を持つとうではないかと言うことになりました。はじめ、既製の「ひとりのちいさな手」にしようかと言うことではじめました。

しかし、大松さんが、子どもと一緒に唱える歌をつくと行って、一晩で歌詞を書いてくれました。それが、土曜夜廻りのテーマソング「なんで夜まわりするの」です。

第二回の夜廻り、一月二十三日から唱いはじめました。

子どもをはじめ大人たちも大変気に入りました。子どもセンターの西田さんのギターに合わせて、子どもたちは熱心にうたいました。歌詞は、少々手なおしましたが、協友会のみなさんにも知ってもらおうと、「週刊えっとう」62・88・1・27と「里夜まわりだより」62・88・1・30に公表しました。

二月十二日、木曜夜廻りに来ている「釜ヶ崎越冬を支援する会」のみなさんから、歌詞

の一部「今の日本は狂っている みんな変なかざりばかり」(3番)の「狂っている」について、問題があるとの指摘を受けました。

さらに、「支援する会」と土曜夜廻りの会とは、その問題について話し合いました。

「支援する会」の指摘は、「狂っている」が、精神の病いを持つ人にとっては、大変重いものなので、日本社会を批判するときでもやはり使わないでほしいと言うものでした。

また、体験的な話をいろいろ聞かせてくれ、土曜夜廻りの会有志は、「狂っている」について、その問題をより深く理解することが出来ました。

その結果「狂っている」を「まちがっている」に、子どもたちと話し合う中(二月二十日、二月二十七日)で訂正しました。

と同時に、日常的に、障害を持つ子どもたちと共に生きることは、どんなに大切なのかも認識をあらたにしました。また、この点を協友会の中でも明らかにし、事柄の重要性に気付いてもらうようつとめました。そして、この経過を「里夜廻りだより」68・3・18に公表しました。

そんな中で、釜ヶ崎で働く青年松永さんからも新しい問題の指摘を受けました。1番の歌詞「おっちゃん 人のいやがるしごとば

かりしてきたんだ」の「人のいやがるしごと」についてでした。自分は、釜ヶ崎の労働者として、たしかに「危険で、きたなくて、しんどい仕事」をしてきたが、仕事は、それだけでは言いつくされない。この歌詞でいくと「日雇いの仕事即人のいやがる仕事」となり、子どもたちにも誤解を生んでしまう。(註：松永さんは、日雇い労働の体験を「お日さん西へ」にまとめてくれた)。むしろ、昨年は日雇い労働者が、どんなに大切な仕事を引きうけてくれるかを学んだので、それが生かせるように歌詞を変えたらいいという提案をうけました。

いろいろ話し合った結果「とてもだじな仕事」と訂正することにしました。

この歌詞の訂正は、二月二十七日、夜廻りにみんなが集まった席上でしました。

この二つの出来事を通して、わたしたちはこの歌をより自分たちのものにする事が出来ました。

この歌をきいた大人の一人は、釜ヶ崎の夜廻りの説明のために、一度、教会に来てうたって下さいと言ってくれました。

それほどよく、夜廻りの気持ちが出ていますからです。

この歌を聞かないで、「釜ヶ崎の越冬夜廻り」について考えている人は、単に「同情」で子どもたちが夜廻りをしていると思っていないのではないのでしょうか。

## ねんでよまわりするの

作詞：みまみ ちんぼろ  
作曲：みまみ

ねんでよまわりするのねんで  
ねんでよまわりするのねんで  
ねんでよまわりするのねんで

ねんでよまわりするのねんで  
ねんでよまわりするのねんで  
ねんでよまわりするのねんで

ねんでよまわりするのねんで  
ねんでよまわりするのねんで  
ねんでよまわりするのねんで

ねんでよまわりするのねんで  
ねんでよまわりするのねんで  
ねんでよまわりするのねんで

この歌は「NHK みんなのうた」より  
みまみ ちんぼろ作詞・作曲の  
「ワタのわいくらみ」の替え歌です。  
みんなも新しい歌を考えておな

おはよう  
おはよう  
おはよう

おはよう  
おはよう  
おはよう

おはよう  
おはよう  
おはよう

おはよう  
おはよう  
おはよう

そうではないのです。土曜夜廻りの子どもで新しい世界に入れたように、この歌を口ずかしてほしいと願っています。  
「狂っている」「いやがる」を通した喜びも、「夜廻り」に対して新しい  
理解をもっ

※ ちんぼろ(肝通し)……………  
沖焼(おきなわ)のことばで友にちや他の人の苦しみやしんどさを知ら  
した時、自分の心・肝までも苦しい・痛いという意味です。

さみしくてちよとかなしくてとてもちんぼろしい——

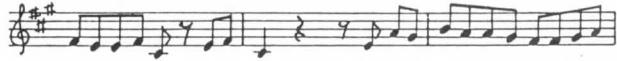


# なんでよまわりするの

作曲：みすみ うんぼう  
作詞：ちあまの ちあま



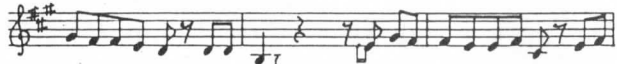
なんで よまわりするの なんて おにぎ



りをかすの なんて みせしるもおげるの なんて



そとでねなあかんの  
 1. おっちゃんとはてとも  
 2. おっちゃんはおこの  
 3. おっちゃんはおにも  
 4. おっちゃんのおあわ  
 5. ぼくのしあわ

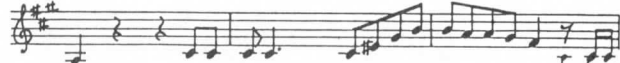


だいいじな しご ばかりしてきたんだ なん  
 4じかから ししごんへ ひろ  
 もつてないの しごん こんやさしいの ぼく  
 せてなんだ だよまわり こんなんかしなくても いー  
 せてなんだ みん な おなじ にんげんだ みん



で まわら せん な おっちゃんかそとで ねんどあかんのや  
 らは さん な をのむのはしごと にあふれたかーさ  
 い さん な おっちゃんかそとで いていちはばんさ  
 い さん な にかまにほかにそみ のしあわでこがそ  
 な さん な おっちゃんかそとで いていちはばんさ

♡ この歌は「NHK みんなのうた」より  
 みなみ らんぼう 作詞・作曲の  
 「アタのぬいぐるみ」のかえ歌です。  
 みんなも 新しい歌を考えてね々



ろう ぼく らは お うちには がえった ら お じう  
 や か わ い の じ き に は っ ぱ り た ら じ  
 だろ う そ い ま の じ き に は っ ぱ り た ら じ  
 う そ い ま の じ き に は っ ぱ り た ら じ



さんや おかあーさんがいて あた たがい ふじ んで  
 てなて おかせんいできたりはれどととて しごん  
 てわり みんなどかかんがえちかっちゃんのを  
 す ること かないと ころを こー



ぐっすりと ゆめみて ねむれる すこし  
 のりつけん そとで ねむしか ない  
 のーことを みよと しなないだろ  
 をゆめみて いっはに ずんばあう  
 おっちゃんと おはなし したいな



さみしくてちよつとかなしくて とてもちむぐるしい

※ ちむぐるし(肝苦し)……………

沖縄(おきなわ)のことはで「友にちや他の人の苦しみやしんどさを知っ  
 た時、自分の心・肝までも苦しい・痛いという意味です。

そうではないのです。土曜夜廻りの子どもで新しい世界に入れたように、この歌を口ず  
 理解をもつてほしいと願っています。

たちが「狂っている」「やかがる」を通し「夜廻り」に対して新しい

# いつしよに春を迎えたかった

土曜夜廻りの会

「お花をおいて歌をうたっていると、私は、亡くなったおじさんの名前は、わからないけど、おじさんのやさしいやさしいおじさんのおおが、なんとなく、私の心の中で、うかんできました。亡くなったおじさんや女の人のおおがいろいろと。今ががんばっている労働者のおおが、健康なからだと、長生きしてほしいと、私は思います」(小5・女)

三月二十八日、午後一時半から五時半まで、土曜夜廻りの会の子どもたちが中心になって、一つの行事をしました。「この冬に亡くなった人を思い出し、霊をなぐさめよう」が、行事の名称です。

昨年度も行旅死亡人―路上で死んで名前もわからず、遺骨の引き取り手もない労働者について調べました。今年度は、単に調べるだけでなく、その人々を記念する行動を起こすことは出来ないかと考えた末、さきの行事になりました。

さきの一節は、その参加者の一人の感想文です。子どもたちは、この行事を通して、行旅死亡という死を深く実感することが出来たようです。

当日のプログラムは、次の通りです。子どもに集まって、亡くなった人についてまじく学習しました。期間は、八七年十二月から八八年三月に限りまりました。それが、釜ヶ崎の越冬活動の期間だからです。この期間に西成区、そのほとんどは、釜ヶ崎ですが亡くなった人々は、三〇人もいたことを知りました。うち名前のわかったのは三人で、あとは名前も全くわかりませんでした。一年間を通じて(八七年四月～八八年三月)釜ヶ崎では、一〇人の労働者が亡くなっています。

近所の区の天王寺区は年間で一〇人、浪速区も年間八人です。西成区(釜ヶ崎)でどんなに沢山の人が亡くなったか想像できます。労働組合が中心に活動する越冬闘争の間



(八七年十二月二十五日～八八年一月十日)に亡くなった労働者は一人です。あとの二九人は、この期間が終わってからです。労働者の生命を守るために仲間の労働者が、どれだけ一生懸命に働いたかを証明しています。

釜ヶ崎キリスト教協友会の越冬活動期には二九人も亡くなっています。もちろん、路上だけでなく、ドヤ(簡易宿泊所)の中で亡くなった人もいます。でも病院の前や西成警察署の前でも亡くなった労働者がいるのです。子どもたちも大変驚きました。生命を守る

場所の前で、死んでいるのですから、驚くのも当然です。

子どもたちは、さらに具体的な作業をしました。それぞれ渡された紙に記されている名前のわからない労働者の死亡の年月日を十字架に書きました。それに花をそえビンの中に入れます。合計二二人分用意しました。(あと七人はドヤの中など)この花をもって、労働者が息を引きとった場所を一つずつたずね、花をおき歌をうたうのです。

出発前には、釜ヶ崎の地図に尋ねる場所をみんなで記入しました。

毎年、「生きて春を迎えよう」とはじめる越冬活動ですが、終わってみると三〇人もの労働者が亡くなっているのを知って、あらためて無力感におそわれます。

でも元気を出して、釜ヶ崎の中をみんなで歩きました。土曜夜廻りの子どもたちに出来る亡くなった労働者に対する精一杯の行動です。

その子どもたちの気持ちに砂をかけたのはなんと警官たちでした。

最初に西成警察署前に花をおくことになりました。それは、二月十七日、四五〜五〇歳ぐらいの労働者が、西成署玄関軒下で亡くなっているからです。

花をおくや警官が、「じゃまになるからどけなさい」といいます。

この光景を体験して、子どもたちは、こん



な感想を残しています。

「『おいたらあかん、はなもじゃまだ』とおまわりさんがいいました。ぼくは、おまわりさんか『へんやな』とおもいました。それやったら、けいさつのまえにさいとるはなもじゃまやとおもいました」

(保育園5歳・男・聞き書き)

「『花をおくな』というた。ぼくは、はらがたつた。…なんでおいたらあかんのか、りゆうをしりたい。おまわりさんは、りゆうを

いうてくれへんかった。しんだ人のおまわりをしてんのに、なんでおいたらあかんの」

(小2・男)

「ぜんぜんじゃまにならへんのにじゃまになるからもってかえって下さいとかいうてきた。私は、そこで初めて思った。何を思ったかというた、ポリコは、おっちゃんたちがおらんでもないと思ってるんじゃないかと思った。おっちゃんたちは、原子力とか、水力発電所とか、ビルをたてたり、いっぱい仕事しているし、それもあぶない仕事ばかりやっているのに、ポリコは、ぜんぜんわかっているに、ええかっこすんな。ほんまにうっとうしいです。私だけでなく、みんなはらがたちます。ポリコは、私たちのてきです」

(中2・女)

「死んだ人にお花あげんの悪い事ちゃうのにポリコがあんなにつめたいやつやんは今まで思えへんかった」(中3・女)

このような子どもたちの怒りの声に接するとき、子どもたちは子どもたちなりに「人を人として」の意味を全身で受けとめていることがわかります。

一緒に行動した大人たちは、それだけの怒りをもつことが出来るでしょうか。子どもたちの感想文を読みながら、越冬活動について深く反省させられています。(註：行旅死亡人については32ページの表をご参照下さい)

(土曜夜廻りの会)